

成城大学『経済研究』第 252 号抜刷（2026 年 3 月）

国際収支の長期的変化 1881-2023：拡張版

明 石 茂 生

国際収支の長期的変化 1881-2023：拡張版¹⁾

明石茂生

1. はじめに

国際収支の内容に応じて経済発展の段階を押し量ろうという考えに「国際収支段階説」がある（Crowther 1957:1-19, Kindleberger 1963:458-61）。経済発展とともに国際収支の内容が変化し、資本輸入国から資本輸出国に転じて、経済が成熟化すると経常収支が赤字化して資本輸出力を失うというものであった。1980年代、日本の経常収支の黒字が慢性化し、資本収支の赤字が拡大していったとき、日本は未成熟の債権国の段階に入り、成熟した債権国に向かっていくものと考えられた（『昭和59年版経済白書』第2章第4節）。現在、日本はその成熟した債権国段階に達したのではないかと解釈される。ところが、国際収支の内容が経済発展の段階（一人当たりGDP水準）に単線的に対応しているわけではないことが指摘されてきており、両者の間には複合的な関係が内在しており、国際収支段階の再定義が必要ではないかと疑問が提示されている。²⁾

-
- 1) 本稿は明石（1995b）の修正・拡張版であり、分析期間が1881-2023年に拡張されている。本稿の第一次稿は第14回ケインズ学会（2024年度）で発表され、その際討論者の西川弘展氏（大阪公立大学）からは貴重なコメントをいただいた。成城大学経済研究所高垣研究会においても発表の機会を得、メンバーである村本孜、浅井良夫、手塚公登、立川潔、林幸司各氏から有意義なコメントを頂戴し、最終稿を執筆する上で参考にさせていただいた。記して感謝の意を表したい。
 - 2) 国際収支段階説については批判的な分析が発表されてきており、先行研究としてはHalevi（1971）、Hitiris（1988）、Ono（2014）などがあげられる。直近ではYang et al（2023）があり、発展段階説の適合性を高めるには国際収支による段階基準の修正だけでなく、他の要因（資源賦存量、産業構造、金融発展度など）の考察も必要と述べている。邦文では尾田（2009）がクローザ

加えてこの国際収支段階説は一国の経済発展の立場から論じており、世界経済における超過貯蓄と超過投資のマクロ的な相互依存関係の視点が欠如しがちである。国際（経常）収支の大きさは国内貯蓄と国内投資の差にもなることは周知のことであるが、長期的な国際収支の不均衡状態は、貿易・国際金融を通じて世界各国・各地域の超過貯蓄と超過投資の状態にそのままつながる。³⁾そして、それが構造的に定着した後大きく変化したとすれば、先ほどの国際収支段階説は世界経済の経済的関係を局面ごとに反映し、歴史的な特性をそれぞれ映し出すものとなるはずである。単線的な段階説ではなく、歴史的に固有のシステムが存在して、より複雑なストーリーを展開し得るとも考えられるのである。

本稿では、一世紀以上にわたる期間を眺めて主要国・地域の国際収支の特性が抽出されていくのであるが、国際収支の段階説から一端離れて、時期ごとの国際貿易システムの固有性をファクト・ファインディングとして取り出し、転換点としての両大戦前後の時期や1970年代に注目して国際貿易システムがどのように構造的に変化したのかを提示していくことにしたい。第2節では貿易収支と経常収支の特性に注目して両者の関係から2つのタイプ（タイプA、タイプB）に分け、赤字黒字の観点からより詳細にパターン化していく。第3節では1881~2023年間ににおける主要国・地域の貿易収支・経常収支を集計化して総輸入額との比率を出して、4つのグループに分けてその特徴を解説していく。戦間期と1970年代が転換期となることが提示される。第4節では主要国・地域の両収支のパターンが提示され、2つのタイプに相応するケースやタイプが転換するケースが転換

(Crowther) の段階説は工業輸出国として大成した国でのみ成立し、日米英の発展形態を説明する限りでは有用と述べ、西(2010)も発展形態の一つのモデルケースとして理解すべきとしている。一方で、武田(2024)は日米の近年の国際収支は内容上クローザの段階説には適合しがたいとし、段階説がどの程度妥当か確認する必要があると述べる。

3) 経常収支が一国の貯蓄・投資差額に等しく、後者が国際資本移動に対応するという視点については須田(1992:14-21)を参照。

時期とともに解説される。第5節では「転換のダイナミズム」と称して、およそ1世紀半に及ぶ期間の中で世界貿易と資金移動の動きがどのように展開していったかを経済覇権国の盛衰に注目しながら俯瞰し、近未来の動きを展望しながらまとめることにしたい。

2. 国際収支のパターン

国際収支の長期的な動きを一世紀以上にもわたって追っていくには、利用可能なデータと対象国がきわめて限られている。貿易統計は比較的長期間利用可能であるが、通関統計が基本であるため、輸出はf.o.b.値、輸入はc.i.f.値で表されている。したがって、対象となる（見える）貿易収支（Visible Trade Balance）はf.o.b.輸出額からc.i.f.輸入額を引いた値となる。さらに、経常収支（Current Account Balance）は利用が限られていて、19世紀末から20世紀初頭の数値の多くは、推計に頼らざるを得ない。経常収支額は、別論文（明石,1995a）で推計・集計されたデータを使用することにした。

ある国々（または地域）から成るグループの経常収支BPは、その内容として貿易収支、貿易外収支そして移転収支などによって構成される。貿易収支VBを以上のようにf.o.b.輸出値マイナスc.i.f.輸入値で定義すると、経常収支の残りは見えざる貿易（Invisible Trade）収支に輸入に関わる輸送関連費（c.i.f.輸入値からf.o.b.輸入値を差し引いた額）を加算した額IVBと観光、特許料、投資収益、賃金所得（または送金分）、公的移転などの収支から成る部分TFによって構成される。つまり、

$$BP = VB + IVB + TF$$

である。

さらに、その国々（地域）のグループのカウンター・パート（相手国・地域のグループ）の経常収支額をBP'とすれば、

$$BP' = VB' + IVB' + TF'$$

であり、かつ

$$BP + BP' = 0$$

がみたまされる。また、貿易上の収支は両グループの間で完結するため、その見える貿易と見えざる貿易の収支合計はゼロ、 $TF + TF' = 0$ となる。すなわち、それ以外の収支 TF も同様に収支合計はゼロである。そうすると、経常収支と見える貿易収支の関係は次のようになる。

$$BP - VB = VB' - BP' + TIV$$

ただし、 $TIV = IVB + IVB'$ であり、全体の c.i.f. 輸入値から全体の f.o.b. 輸出値を差し引いた値に対応し、以下では TIV を c.i.f. 総収入と呼ぶことにする。上記の2つの等式から $VB + VB' + TIV = 0$ すなわち見える貿易収支の総和は c.i.f. 総収入のマイナス値に等しいことがわかる。

ここで、経常収支 BP が見える貿易収支 VB より大きいケース（これをタイプAと呼ぶことにする）と逆に経常収支が見える貿易収支より小さいケース（これをタイプBと呼ぶことにする）に大別する。経常収支と貿易収支の符号によって2つのタイプはそれぞれ次のように3つの状況に類別される。

タイプAは、経常収支 BP 、貿易収支 VB とともに黒字（正值）である状態（A1）、経常収支は黒字で貿易収支が赤字の状態（A2）、経常収支、貿易収支ともに赤字の状態（A3）に分かれる。これに対応して、カウンター・パートの状況が図1の下半部に描かれている。 $VB' + TIV$ は見えざる貿易の総収入つまり c.i.f. 総収入を含んでいるので、実際の貿易収支はそれより小さい（赤字の方向）水準になる。したがって、貿易収支 VB' が経常収支 BP' より大きいかどうかは一概にはわからない。カウンター・パートの状況は外見上タイプBとして表されるため、図の下部に（ ）付きで対応したタイプBの状況が記されている（次の図2も同様であることに注意されたい）。

つぎに、タイプBが図2に描かれている。貿易収支、経常収支がともに黒字である状態（B1）、貿易収支は黒字で経常収支が赤字の状態（B2）、貿易収支、経常収支ともに赤字の状態（B3）の3つに分かれる。対応し

国際収支の長期的変化 1881-2023：拡張版

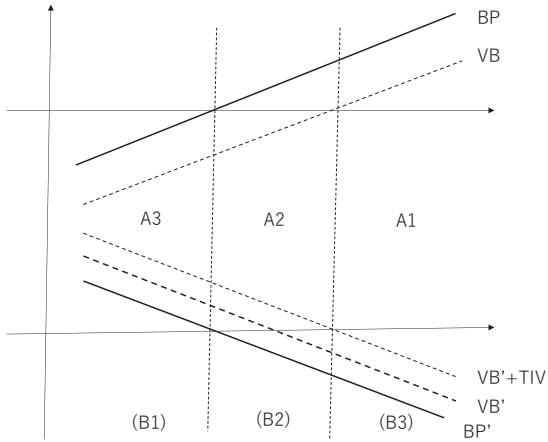


図1 タイプA

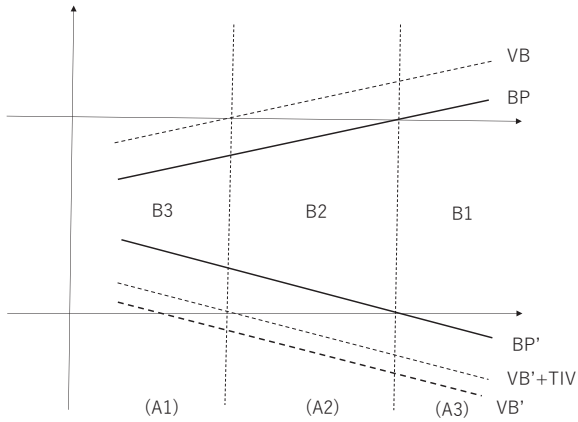


図2 タイプB

で、カウンター・パートも図2の後半部に描かれているが、直観的にわかるように、このタイプBではカウンター・パートにおいて貿易収支 VB' は経常収支 BP' より小さい（タイプAとして現れる）。

歴史的に国際収支の動きを眺めていくと、経常収支・貿易収支の大きさ

(黒字・赤字)が変化しても、タイプは構造的に変化しない事例が数多くみられる。経常収支の黒字・赤字は資本の国際的移動の状況を表し、それは長期的には投資収益の収支に大きな影響を与える意味でタイプの変化を促す要因である。資本輸入国か資本輸出国かの違いは自ずとそのタイプのあり方を規定することになり、長期的に維持可能なタイプ(状態)の体制が限定されてくる。また、タイプが変化するケースは、とくにそれが国際貿易体制におおきく影響を与える国・地域である場合には、構造的変化の一形態としてとらえることができる。

本稿では、以上のような視点に立って、貿易体制の構造的変化の状況を歴史的に観察していこうとするのであるが、まず次節では大きく地域別に分けて1881年から2023年までの国際収支の動きを追って、その特徴を確認していくことにしたい。

3. 世界経済と国際収支

次の図3, 4, 5, 6は、主要な国・地域の経常収支と貿易収支を当該17か国・地域の輸入合計額で割った値(対総輸入比)の9カ年平均値を表している。⁴⁾ 各年次によって利用可能な国・地域が異なってくる(とくに2

4) 分析に使用した国際収支のデータについては明石(1995a)の資料を参照し、とくに第2次世界大戦後の期間については、UNCTADSTATならびにIMF: *International Financial Statistics* の貿易・経常収支統計を使用した。対象となった国・地域は、オーストリア・ハンガリー・チェコ・スロバキア、アルゼンチン、オーストラリア、カナダ、中国、フランス、ドイツ、インド、イタリア、日本、ロシア・ソ連、南アフリカ、スカンジナビア、タイ・インドネシア、トルコ・イラク・シリア・サウジアラビア、連合王国(イギリス)、アメリカ合衆国の17か国・地域である。第2次世界大戦後のオーストリア・ハンガリー・チェコ・スロバキアとロシア・ソ連はそれぞれ1945-1979と1945-1991までの期間が欠落している。タイ・インドネシアは戦間期から第2次世界大戦後の期間までのデータを使用しており、トルコ・イラク・シリア・サウジアラビアについては、第1次世界大戦前はオスマン帝国の資料であり、戦間期は1919-1925、第2次世界大戦後はイラクが1976-2004の期間紛争のため欠落している。総輸入額は、USドルで換算された輸入額を合計した値であるが、収支比を求める際の分母となる総輸入額は対応する年次に経常収

つの大戦期間は枢軸国のデータが欠落している), ならびに第1次世界大戦以前の期間を推計値で補っているため, その後の期間の収支データにくらべて精度が落ちてしまうなどという, 非整合的な部分もあるのであるが, それでも一世紀を超えた期間の国際収支の動向を地域別に追っていくことが可能である。経常収支・貿易収支を欧州, 北アメリカ(アタリカ合衆国, カナダ), その他の諸国に大きく分け, そして全体の合計額に負号をつけた値を残余分として(カウンター・パートにあたる部分として)別途にあらわすことにした。したがって, この部分の貿易収支には見えざる貿易の全体の収入分が組み込まれていることになり, 実際に見える貿易収支にあたる値はより小さくなる。

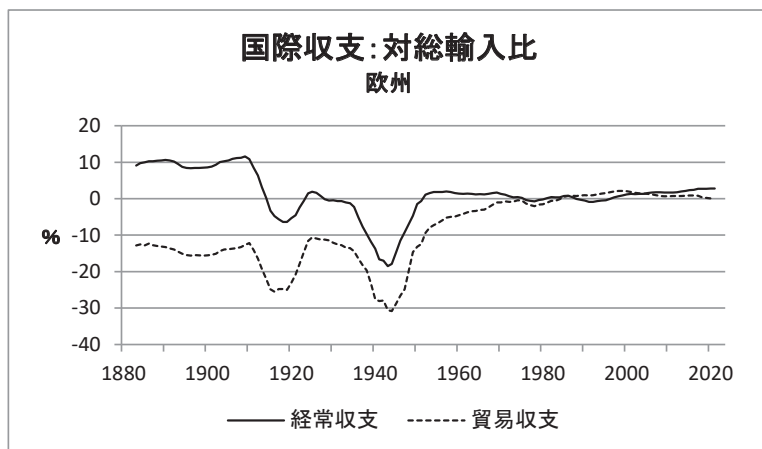


図3

支が利用できない国・地域があれば, その国・地域の輸入額も削除して調整されている。17 国・地域の輸入合計額と世界輸入総額との比率は, 1881 年 75%, 1913 年 72%, 1928 年 74%, 1960 年 57%, 1973 年 65%, 1990 年 64%, 2017 年 61%であった。

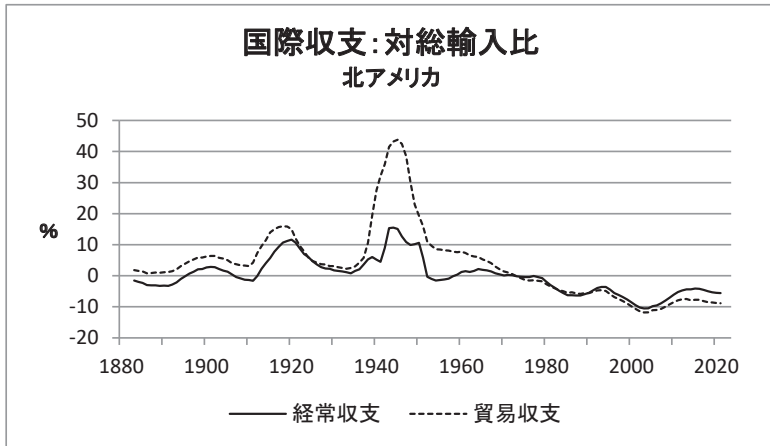


図4

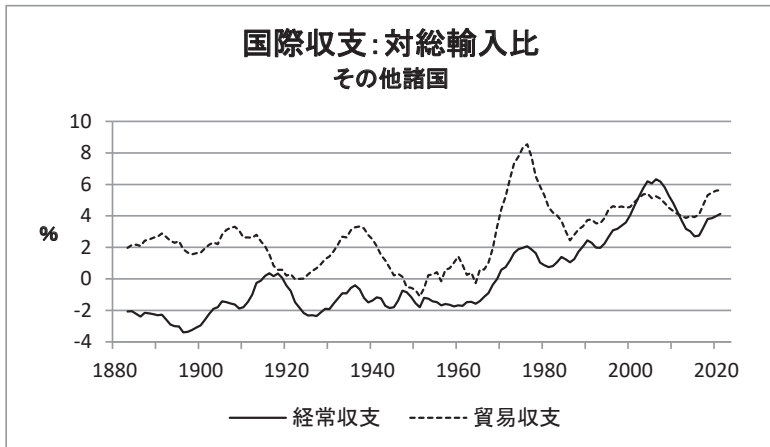


図5

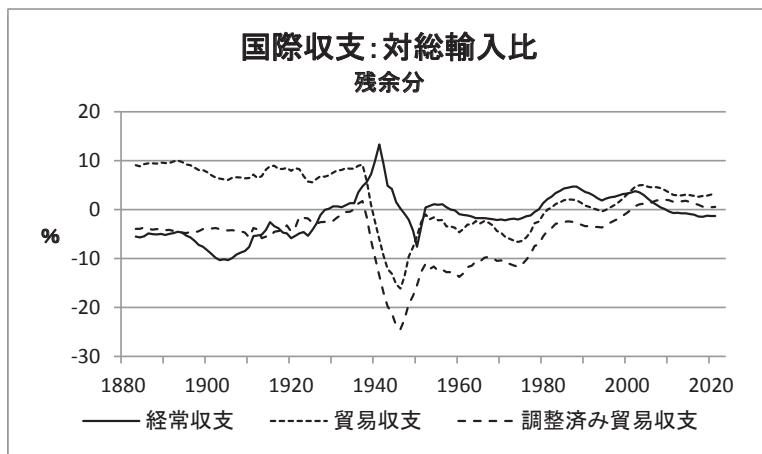


図6

図から観察される特徴は、欧州と北アメリカが少なくとも1880年代から1950年前半までの期間、逆相関の関係にあったということである。欧州は終始一貫してタイプAであったのであり、第1次世界大戦までは総輸入比10%に及ぶ経常収支の黒字を計上していた。2つの大戦は大規模な資本流入を必要とし、第1次世界大戦後は戦前のような恒常的な大規模の黒字を計上することができなくなった。また、貿易収支は慢性的に赤字であり、その規模はやはり総輸入比10%以上にもおよび、これは第2次世界大戦時まで続いた。第2次世界大戦後の欧州の貿易収支はいままでになく総輸入に対する赤字幅を縮小させ、構造的に大きな変化があったことが推量される。欧州はA2（ときにはA3）の状態を維持してきた。ところが1990年代かけてB2からB1に転換し、2000年代にはいるとA1になり貿易・経常収支ともに黒字の地域に転換している。1970年代以降収支比率は顕著に小さくなっており、欧州地域のインパクトは相対的に低下していることも窺える。

他方の北アメリカは、1880年代から90年代半ばまでB2の状態にあり、

その後循環的な変動を示しながらも B1 の状態に移り、1970 年代以降 A3 の状態に移行していった。この 70 年代以降の動きは、次のその他の諸国の動きと呼応していた。2つの大戦期間は、欧州とは逆に貿易・経常収支ともに大幅な黒字を計上しており、大量の資本（または公的援助）が北アメリカから欧州へながれたことを示している。

その他の諸国（ただし、アジアの比重が高い）は、ほとんどの期間タイプ B であり、1960 年代までは B2 の状態にあった。1970 年代以降になると B1 の状態に移行して、その黒字幅を急激に拡大させている。これは、1970 年代は中東諸国（とくにサウジアラビア）、1980 年代は日本の黒字が、そして 2000 年代は中国の黒字が大きく貢献していたからである。とくに 2000 年代後半～2010 年代前半の中国の経常収支は一時 A1 状態を実現させるほどインパクトの大きなものであった。この地域の構造変化が 1970 年代にあったといえるのであり、北アメリカ（とくにアメリカ合衆国）の構造変化と対応していたのである。

そして、最後に残余分であるが、残差分の貿易収支には世界貿易の c.i.f（保険、運賃 cost, insurance, freight）分が含まれ、その分ほかのケース比べ過大になっている。この付加分を取り除き調整した貿易収支が付随して図示されている。ただし、残差分の内容には資料上の欠落分が含まれているため、年代によって資料上の質が異なってくることは認識されなければならない。⁵⁾ それでもカウンター・パートとして残余分をみていくと、大体

5) 調整のために、世界貿易の c.i.f. と f.o.b. の比率が必要であり、その推計のために第 1 次世界大戦前は筆者の世界貿易推計を利用し、戦間期は League of Nations, *Trade Statistics, World Trade* を、第 2 次世界大戦後は UNCTADSTAT の貿易統計を利用した。第 1 次世界大戦中は本稿で取り上げられた国・地域から戦時期間も利用可能な系列を使って比率を推計して代理指標とし、戦前の推計と接続させて戦時期間を推計した。1933 年以降の *World Trade* 所収の世界輸入額は過少推計の疑いがあり、17 개국・地域との比率を 1928-32 年平均 0.74 に補正するように 1933-38 年の c.i.f. 総収入を上方修正した。第 2 次世界大戦中は資料の絶対的な欠落から 1939-45 年には大戦前 1935-38 年の平均値を、1946-47 年には 1948-50 年の平均値をとって補間している。

1930年以前はB2の状態にあり、1930年代後半からB1に移り、第2次世界大戦中はA2に転換していったことがわかる。大戦中は資料の利用可能な国・地域がきわめて限られ特異であったことを考えれば、貿易収支の異様な赤字は戦争当事国・地域の物資の大量輸入の脱漏を反映しており、経常収支の黒字は先行して所得の流入が（ラテンアメリカを含めた）物資提供国・地域においてみられたことを示唆している。戦後1950年代以降A3、そして1980年代以降A1の状態に移り、2000年代にB1ないしB2状態になっている。1930年以前の状態に戻っているわけで、これも構造変化の一兆候といえるかもしれない。

c.i.f. 総収入を控除した（調整済み）貿易収支と経常収支との関係を見ると、第2次世界大戦前まで両収支の差異が小さく、c.i.f. 総収入がそのギャップの大半を占めており、その多くが17か国・地域とくに欧州地域に還流されていたことが示唆される。第2次世界大戦中の資料は極めて不完全であり、残差分にその脱漏分が反映されていたわけであるが、この時期以降2000年頃までタイプはタイプAに移行して継続し、調整済み貿易収支は赤字であり、それを埋めるようにc.i.f. 総収入以上の資金流入が残差地域に生じていたことがうかがわれる。時間の経過とともにこの地域の存在感が強まっていったことが示され、2000年代になると、調整済み貿易収支は黒字に転換し、他方資金は流出に転じている。

1930年前後のいわゆる大不況期は、資本の動きを構造的に変化させる節目であったといえる。1930年代も含めてこの時期までの残余分の内容を占める地域は、欧州のその他諸国を除けば、ラテンアメリカであり、アフリカであった。⁶⁾ 第2次世界大戦後はとくに1970年代以降を占める地

6) Lévy-Leboyerによれば、イギリスの場合、1880年ごろには欧州、アメリカ合衆国、ロシア以外の地域への海外投資残高は全体の4割弱であったのに対し、1913年には全体の4分の3になっており、フランスの場合、1880年頃は全体の3割弱であり、1913年では4割であった。ドイツの場合も、1913年は4割であった（Lévy-Leboyer 1977:25）。

域としてラテンアメリカ・アフリカだけでなく、アジア NIES、東南アジアなどが含まれるが、ここで取り上げているのはあくまでも残余分として動きであり、より具体的な収支上の特徴を分析するには、それら国々の国際収支の動きを別途に追う必要があることはいうまでもないであろう。

4. タイプ別分析

この節では、主要な国・地域を個別的に取り扱って、国際収支の歴史的動向を 1881-1990 年の期間に注目してタイプ別に分類してみていくことにしたい。（以下の図は対自国輸入比の9ヵ年平均値を%目盛で表示している。）

4.1 タイプA

タイプAの国・地域としては、フランス、イタリア、イギリスをあげた。（図7, 8, 9）

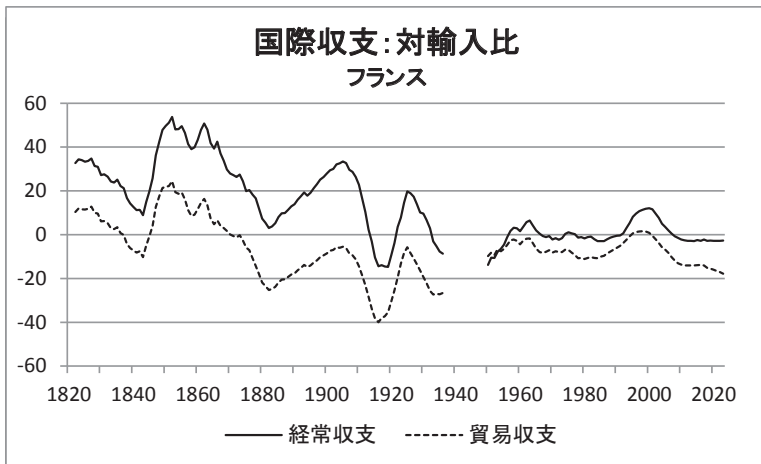


図7

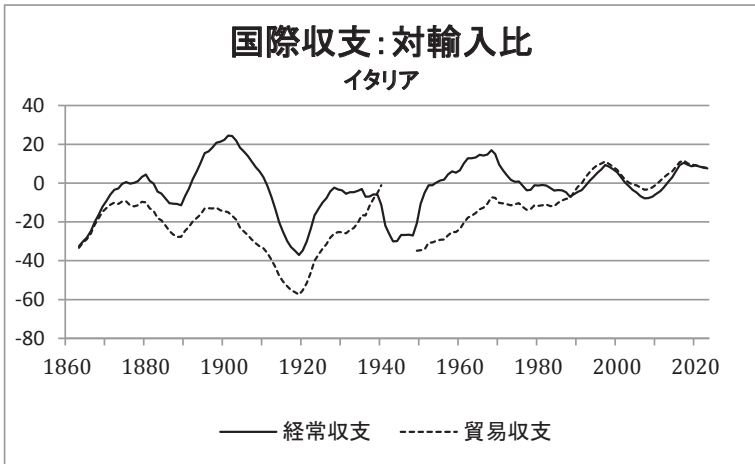


図8

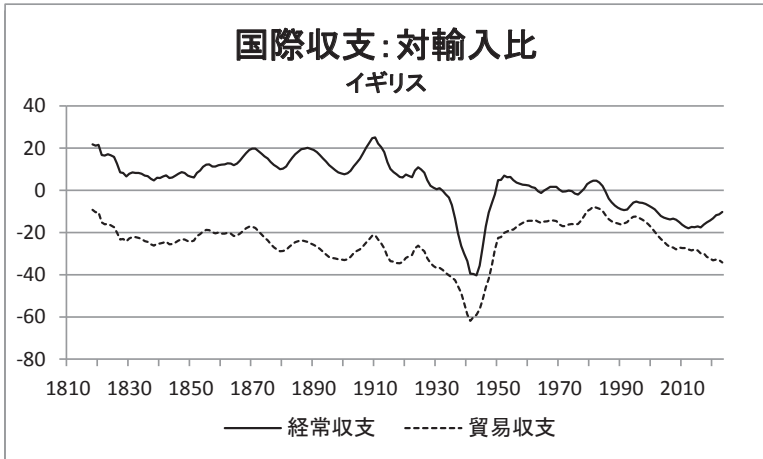


図9

フランスは、典型的にタイプAの国であり、19世紀前半はA1状態であり、それが後半になるとA2状態に落ちついた。その間、循環的変動がはっきりとみられ、第2次世界大戦後は、A2状態から次第にA3状態に

変わってきている。

イタリア⁷は、タイプAであるのは中国と同じく、季節労働者ならびに移民からの巨額の送金によるところが大きい。経常収支は黒字を維持していたとはいいがたく、むしろ赤字基調の中で海外送金が大きかった時期に一時的に黒字に転じていたといった方が適切であろう。したがって、イタリアの体質はA3かA2状態にあった。ただし1990年あたりを境にイタリアはタイプBに転換し、均衡近傍で変動している。

連合王国(イギリス)の体質は、フランスときわめて似ている。しかし、フランスが19世紀前半ではA1の状態にあったのに比べると、イギリスの場合は18世紀後半にはすでにA2の状態にあったと推量される。18世紀前半にても経常収支は貿易収支より大きかったと推定され、A1かA2の状態を循環的変動の中で維持していたと考えられる。⁷⁾ 第2次世界大戦後は、やはりフランスと同じく経常収支は均衡状態を前後しており、ときには赤字にも陥っていた。(つまり、A2とA3状態にある。)A2の状態がきわめて長期間続いていた点で、イギリスは特異な地位にあったといえよう。

4.2 タイプB

アルゼンチンは、1950年代の一時期を除けば、タイプBそれもB2状態を長期間維持していた。1889年のデフォルト以前は経常収支も赤字であるB3状態にあったのであるが、永続化せず輸入の抑制によりB2の状態に落ちついたわけである。第2次世界大戦の戦時景気は両収支とともに巨大な黒字を計上させたのであるが、1950年代になるとその反動が出て、1970年代以降は貿易収支と経常収支が全く逆方向に展開するというB2状態ながら特殊な形態を示している。

7) 松井(1991:322-23)によれば、輸入をc.i.f.を含んだ額に修正したうえで算出される貿易収支は18世紀中においても概ね赤字であり、その点でイギリスは18世紀の多くはA2状態にあったと推測される。

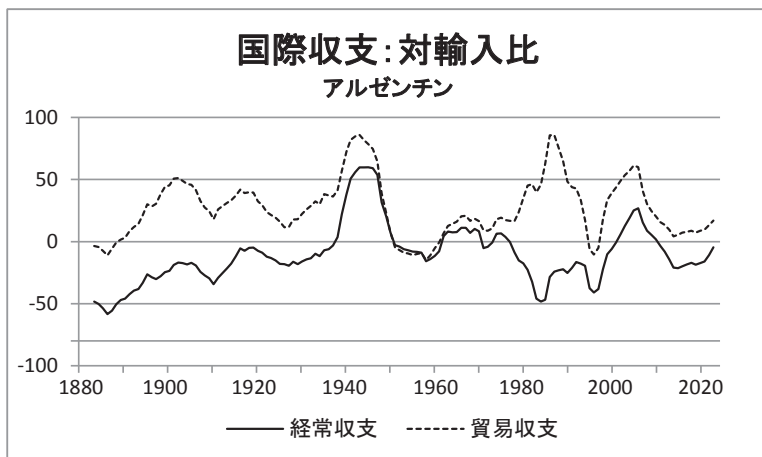


図 10

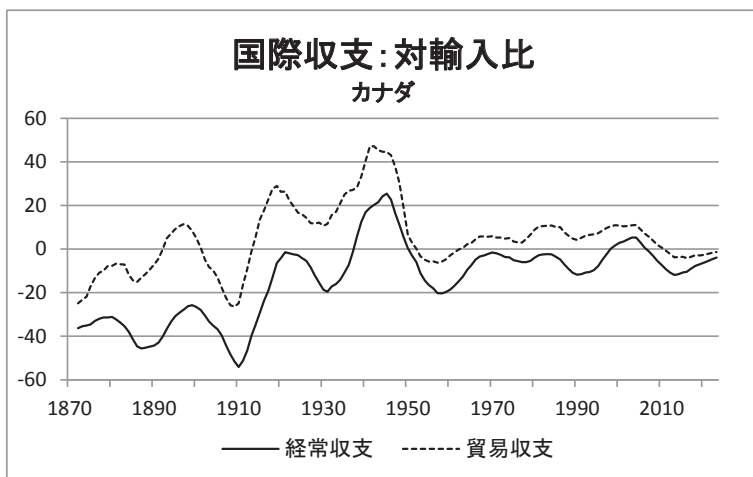


図 11

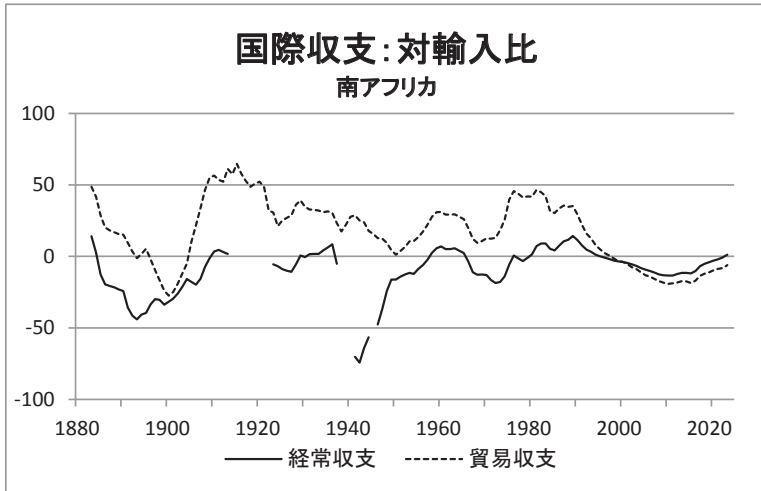


図 12

カナダも一貫してタイプBの国であったが、第2次世界大戦時まで循環的変動を示しながら、B3からB2、B1へと改善していったことがわかる。第2次世界大戦後をみると、ダイナミックな様相は薄れ、なお循環的変動を示しながらもB2の状態を維持していた。南アフリカは、20世紀に入ってトランスヴァール大金山の発見により金輸出が貿易収支を大幅に改善させたわけであるが、経常収支はむしろ均衡値付近を前後するように推移していた。資本・労働の海外からの導入は南アフリカ経済にとって不可欠であり続けたのである。南アフリカは19世紀末のB3状態から抜けて、B2、B1の状態を繰り返してきた。ところが2000年代になると、A3状態に転換し、赤字体質に転換している。

4.3 タイプの転換

第1次世界大戦がタイプの転換を促した国としては、まずドイツがあげられる。ドイツは、1870年代には貿易収支が赤字基調であり、とくに

1889年以降赤字幅は対輸入比においても拡大した。他方、経常収支は黒字であり、1880年代になると急激に拡大し、その後、対輸入比で10%程度に収まった。第1次世界大戦前のドイツはイギリス、フランスと同質のA2状態にあった。しかし、大戦後は一挙に資本輸入国に転化し、タイプBに変わった。1920年代は資本輸入国のB2状態であり、1930年代になるとB1状態に転じた。これは為替規制による輸入抑制、貿易収支の黒字化に負っている。第2次世界大戦後になると、すでに1950年代後半から両収支は黒字のB1状態に定着していた。

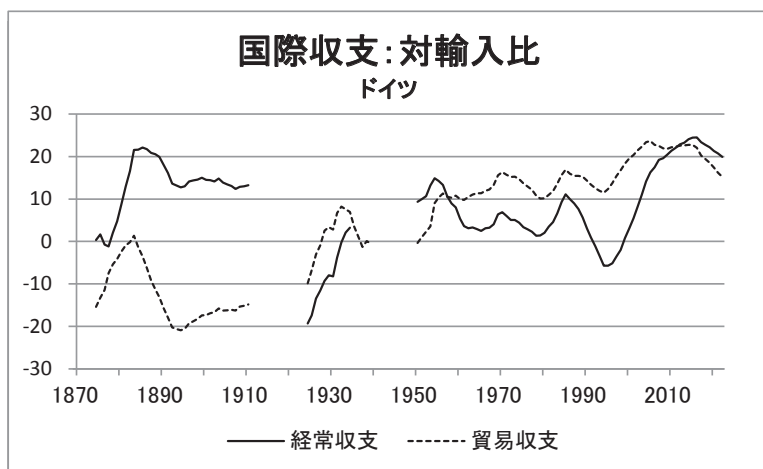


図13

さて次のオーストリア・ハンガリー・チェコ・スロバキアは、1905年頃を境にB1状態からタイプAに転化して、第1次世界大戦直前にはA3状態になっていた。大戦後はオーストリア・ハンガリー帝国が崩壊し、オーストリア、ハンガリー、チェコスロバキア（1993年からチェコ、スロバキア2ヵ国）の国際収支合計は図15のように戦間期ならびに1980～90年代までA3状態を維持しており、2000年代以降タイプBに移っていた。90年

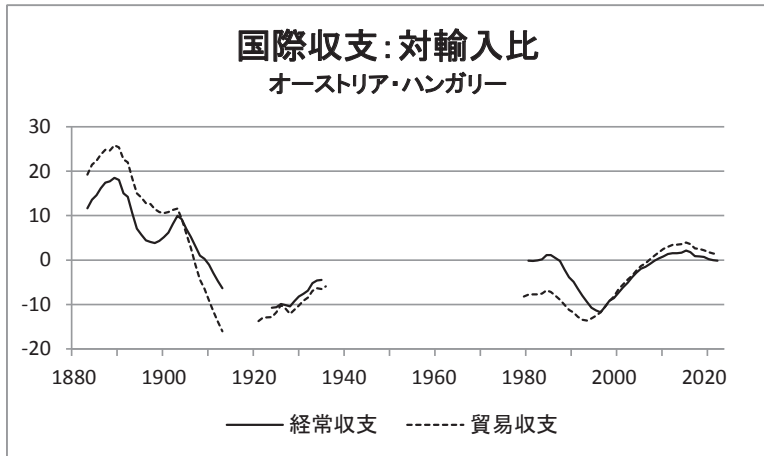


図 14

代までタイプAを維持させた要因として、投資収益より移民から海外送金
が重要であった。⁸⁾

中国であるが、中華人民共和国成立後1950年代はタイプBのB2, B3
状態にあったが、1960～70年代にはB1状態に移行していた。1980年代
になると中国はタイプAに転換し、開放路線に舵を切った時期に対応して
いた。さらにさかのぼって1890年代に一時的に経常収支が貿易収支以下
になっていたが、これは日清戦争の賠償金支払のためである。これを除け
ば、華僑による巨額の海外送金がタイプAの状況に中国を維持させていた。
この間、中国はA1からA3状態になり、銀輸出のせいもあって1930年
代はA2状態に転じている。タイプAという性格は、1950～70年代を除
いて、2000年代まで本質的に変わっていなかったように思われる。1980年
代以降2000年代まで、中国はおおむねA2ないしA1状態になっており、

8) 戦間期以降は、中東と同じく複数以上の国のデータを合計して收支比率を導
出しているため、輸入総量は当該国間の輸入額を含むことになり、第1次世
界大戦前の帝国時代の数値に比べると、比率の絶対値が小さくなる可能性が
高くなることに留意されたい。

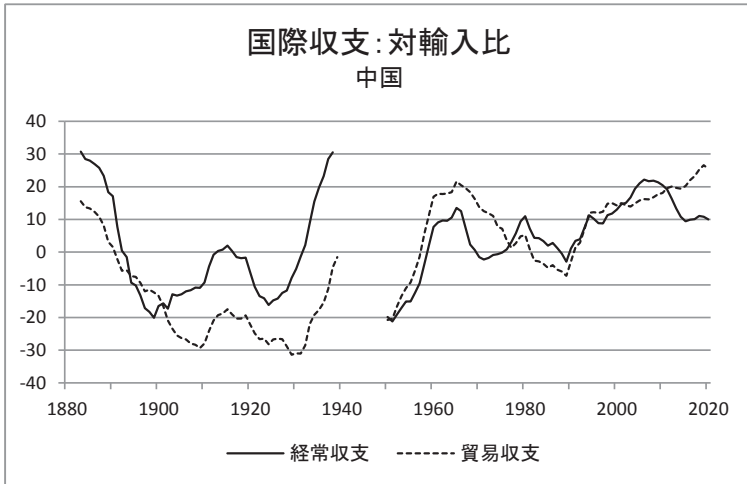


図 15

貿易収支は赤字であっても海外からの送金や投資収益を含めた他の収入でそれを補っている。2010年代になると経常収支比の値が低下しB1状態に変わっている。

インド（第2次世界大戦後はインド、パキスタン、バングラデシュを含む地域）は、第2次世界大戦前まではタイプBであり、B1またはB2の状態にあった。大戦後は、貿易・経常収支とも赤字化し、とくに1970年代以降になると、タイプAでA3状態になった。タイプAの要因はやはり季節労働者による送金であり、中国と同様に、インドも海外の労働による所得の受取は無視できない規模であったのであるが、1970年代になるとそれがより顕著に表れてきたということである。

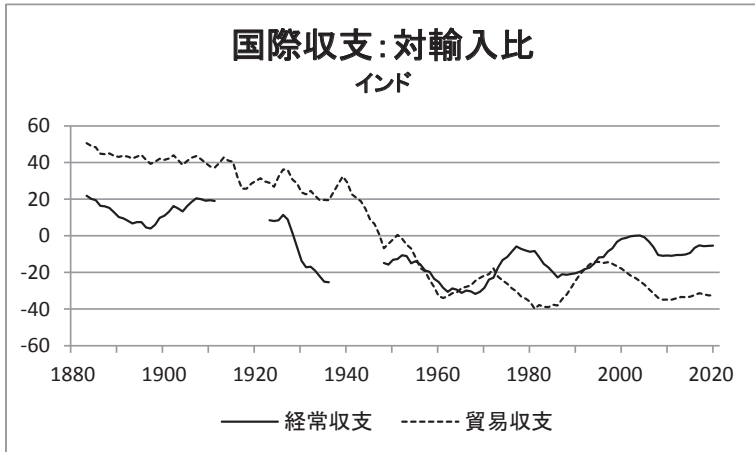


図 16

日本の場合、転換はむしろ早く、1890年頃にはタイプBからタイプAへ転換したと思われる。それでも経常収支に関しては均衡値を前後にして変動せざるを得ない状況にあり、貿易収支は1960年代半ばまで慢性的な赤字体質にあった。その意味で、A2かA3状態をくりかえしていたわけであり、それが1960年代半ば以降黒字に転じて拡大し続け、A1状態が定着化したのである。他方2000年代になると、貿易収支の黒字幅は縮小し、直近では赤字に陥るようにもなっている。

いわゆる中東地域は、利用可能な統計が時期、国によって異なるので一貫して表示できないのであるが、少なくとも第1次世界大戦以前のオスマン帝国時代ではB3状態が維持されており、赤字幅は比率のうえでも拡大していた。1960年以前では、貿易収支は赤字状態であったが、その後石油輸出が経常収支に組み込まれていき、1970年代の石油価格の引き上げによりその収支は大幅な黒字を計上することになった。戦間期はA3状態であったと推定されるが、第2次世界大戦後サウジアラビアの存在が大きくなるにつれて、その内容がより強く反映されて、B1の状態が出現する

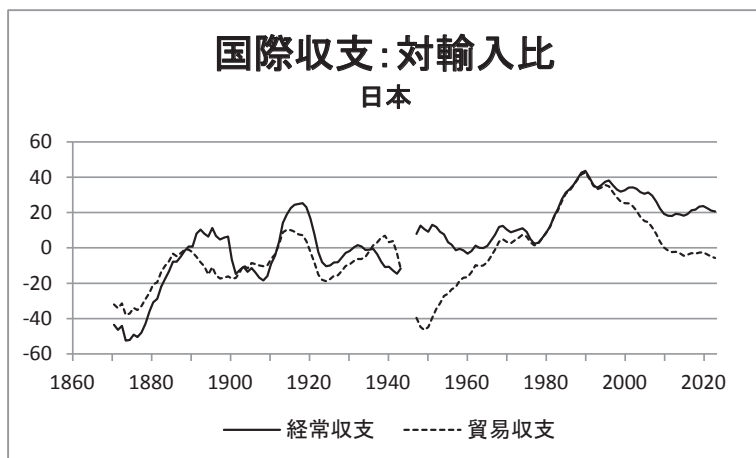


図 17

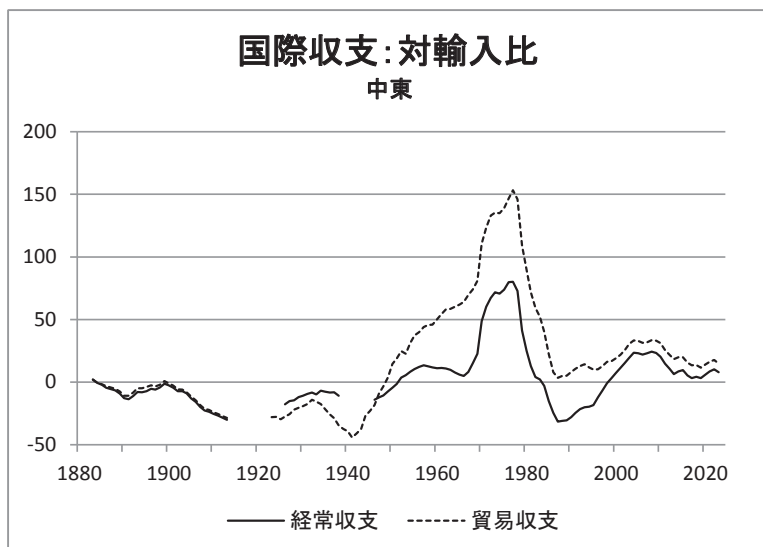


図 18

ことになったのである。しかし、1980年代になると、経常収支は赤字化してしまう。巨額の黒字が1970年代の産物であったということである。

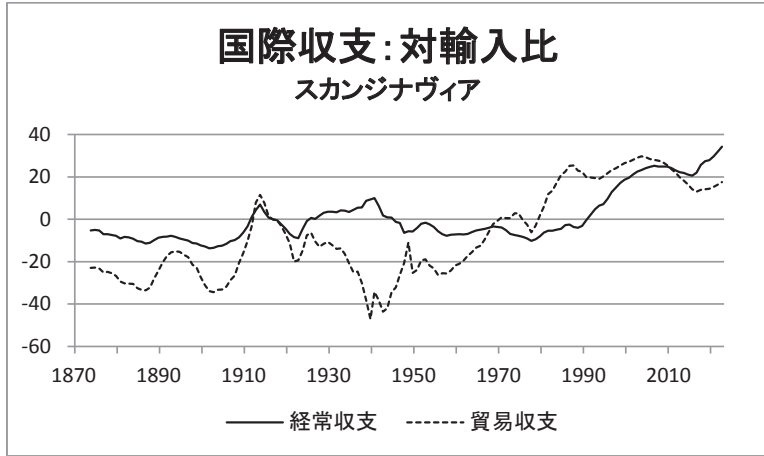


図 19

スカンジナヴィア（デンマーク、ノルウェー、スウェーデン）は、タイプAのA3状態がほとんどの期間で続いていた（ただし、戦間期はA2状態が支配的であった）。1980年頃からそれが一転し、貿易収支が黒字化してB2状態が出現した。これは北海油田からの原油収入によるところが大きい。

最後に、アメリカ合衆国であるが、1870年頃を境にタイプAからタイプBに転換している。それ以前ではどちらかというとならA3状態であったのに対し、その後はB1状態へ循環的変動を示しながら移行している。そして、第2次世界大戦時をピークにしてその後比率を縮小させて、1970年頃を境に再びA3状態に移行している。アメリカ合衆国の場合は、転換の反復がこのように明示的に確認されるのであるが、アメリカ合衆国の世界経済に与える影響力を考慮にいれると、この2つの時期は世界全体からみても無視できない転換点であったと考えられる。

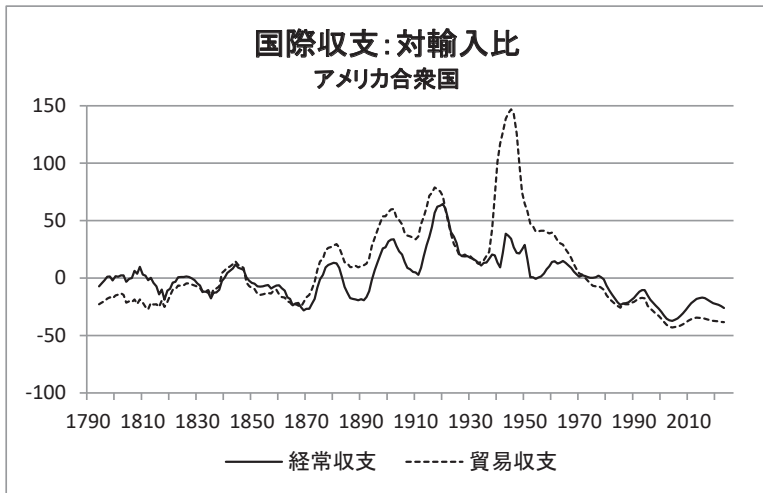


図 20

5. 転換のダイナミズム

第3節の地域別収支の比較から得られた成果は、少なくとも1880年代から第2次世界大戦までは一つのシステム（これを金本位システムと暫定的に呼ぶことにする）が構造的に維持されてきたということであろう。ただし、欧州が圧倒的な経常収支の黒字を得ていたのは第1次世界大戦までである。残余分からみた場合、貿易収支（商品取引）の上では第2次世界大戦までであり、経常収支（資本取引）の上では1930年頃に転換へ向けて変化が現れていた。

この金本位システムの特徴は、中核地域（欧州）がA2状態にあり、それに相対する周縁地域（おもにラテンアメリカ、アジア）はB2状態にあったということである。B3状態やA3状態もみられたのであるが、前者の場合は永続化できず、早晩B2状態に移行せざるを得なかった。後者のA3状態は経常的に見えざる輸出や海外送金などの移転分によって資本流入の

コスト(金利支払)を賄うことができ、比較的長期間その状態を維持することができた。それでも基本的構図は、商品は周縁地域から中核地域へ流れ、資本は逆に流れていた。これを維持するためには、見えざる貿易と投資収益などによって資金が周縁地域から中核地域へ恒常的に流れていることが必要であった。

北アメリカ(とくにアメリカ合衆国)はタイプBであり、周縁地域の特徴をもっていたのであるが、貿易・経常収支ともに黒字化して(B1状態になって)いき、金本位システムの中で異質な(ある意味では秩序破壊的な)因子になっていった。戦間期の状況は、(少なくとも1920年代は)システム全体の構図は変わっていなかったが、欧州地域の経常収支は均衡化して資本輸出地域は北アメリカに移った。1930年代になると、欧州は遂にA3状態になり、超過輸入のために資本を輸入する立場に変わっていった。第2次世界大戦へむけて商品も資本も欧州へ流れていくという意味で金本位システムの構造が崩壊してしまった。

第2次世界大戦後のいわゆるブレトン・ウッズシステムは、1970年初頭の崩壊時期まで続くのであるが、国際収支の形状からもそれははっきりと確認された。このシステムの特徴は、金本位システムに比べて、総輸入に対する中核地域(北アフリカ)の貿易収支・経常収支の値(比率)が小さく、タイプB(B1状態)を維持させていたことである。とくに経常収支の比率の小ささがめだつのであるが、これは貿易収支の黒字の一部を公的援助(ないしは軍事支出)の形で大規模に移転させていたからである。これに対応して、欧州地域ならびにその他の諸国の貿易収支は赤字であるが、その総輸入に対する比率は小さくなく、同様に経常収支の比率も大きくなかった。その構図は、商品が中核(北アフリカ)地域から欧州を含めてその他の周縁地域に流れているが、その資金は中核地域からの資本輸出の形以上に所得移転の形でまかなわれていたということである。

1970年頃を境に観察されるシステムの転換は、北アメリカの貿易収支

が悪化して、状態が B1 から A3 の方へ移行していったことに大きく負っている。とくにアメリカ合衆国においてタイプ A への転換が生じており、赤字体質の定着の中で国際取引の内容の変化が読み取れる。他方、その他諸国においては 1960 年代後半から状態が B3 から一躍 B1 へ移行していた。それは何よりも 2 つの石油ショックによって資金の流れが大きく変化した事実を負っている。しかし、より構造的（または既存のシステム破壊）要因としては、日本の経常収支の継続的な黒字の計上化があげられる。実際、1980 年代に産油国の国際収支は悪化していくのであるが、その他諸国全体としては日本を中心に B1 の状態を強化している。また、残余分の貿易収支は赤字の比率を縮小させ、2000 年代には黒字に転換している。商品、資本ともに日本を含んだ広範囲の地域から他の地域（とりわけアメリカ合衆国）へ流れるという構図が 1970 年代以降維持されていることが読み取れる。

2000 年代に入ると大きな構造変化の予兆がみられる。北アメリカはすでに 90 年代には A3 の状態になっていた。欧州は A1 の状態、その他諸国は A1 から B1 状態に変化し、残余分は B1 そして B2 状態に変化していた。明らかに 2000 年代に入り、北アメリカを除いて多くの国・地域は A1 ないし B1・B2 状態になっており、北アメリカ（とくにアメリカ合衆国）が世界的レベルでの物財と資金の吸収地域となって、欧州、その他諸国と残余諸国・地域が相対する状況が生み出されている。アメリカ合衆国が依然として中核国であることは変わりなく、他方で赤字国であるという事実は過去の経験にない新奇な状況である。これは、アメリカ合衆国が大成長地域となって、その他地域を跨って築かれたサプライチェーンを通して生産された商品を吸収し、支払われた代金と投資収益の一部が再びアメリカ合衆国に投資されるという世界的な資金循環が形成されていることを示している。この状況が今後も維持可能か判断はつきかねるが、近年貿易収支以外による経常収支の改善（デジタル収支の貢献）が観察され、体質

の改善の予兆がみられなくもない。

最後に、イギリス、アメリカ（合衆国）、日本、中国の4カ国の経常収支の対輸入比率の動きを比較して資本輸出国の変遷の様子をみていくことにしよう。図21には4国の経常収支（対輸入比）の11ヵ年平均値（%）が描かれている。（ただし、2つの大戦期間はその形状を極端にゆがめてしまうのであらかじめ削除しており、中国については1970年代以降が描かれている。）これをみると、イギリスとアメリカの逆相関の対応関係は、アメリカがタイプAからタイプBの変換を示した1870年代から観察される。この関係は、第2次世界大戦時まで続いていた。日本とアメリカの関係については、第2次世界大戦以前は変動のずれがあって、両者の収支は対応していなかったが、戦後の1960年代にはいると、逆相関の関係がみられるようになり、とくに、1970年以降はつとに対称的である。21世紀に入ると、日本の比率の低下を補うように中国の比率が高まっていることがわかる。

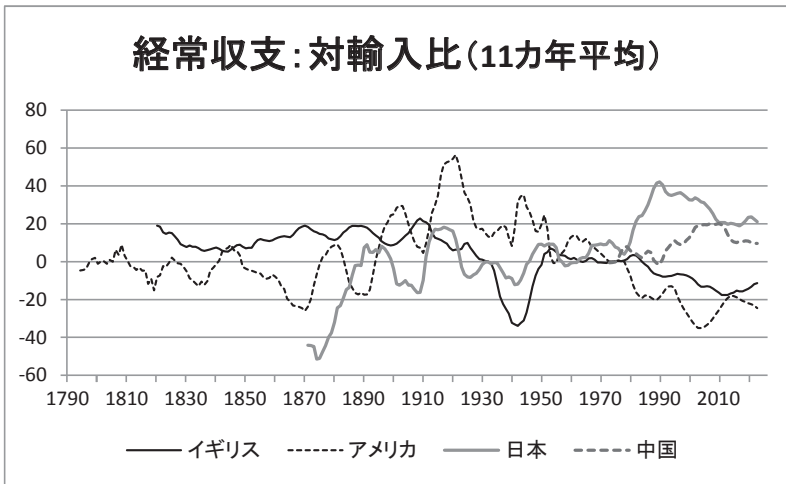


図21

このように経常収支の推移は中核国の交替を窺わせてくれるが、すでに紹介してきたように経常収支のみならず貿易収支との関係は構造的変化のより本質的な姿を垣間見せてくれる。世界経済における貿易と資本移動を通じた資金循環の様相を両者の関係から窺うことができる。金本位システムと称した世界経済体制の下では中核となる欧州（とくに西欧）が貿易収支の赤字を継続させて商品の吸収地域になる一方で、見えざる貿易の優位性と海外投資収益の還流により経常収支の黒字化を維持し資本輸出を継続させていた。戦間期を契機にアメリカ合衆国は巨額の貿易収支と経常収支の黒字を計上し、とりわけ第2次世界大戦後中核国としての地位を確立することになった。その特徴は一貫して経常収支が貿易収支以下であったことであり、アメリカ合衆国に集積した資金は資本輸出のみならず大規模な所得移転により、アメリカ合衆国からその他諸国へ世界的な資金還流が行われていた。

しかしこの体制は継続できず、1970年代に入りアメリカ合衆国は中核国として第2局面（変動相場制体制）に入り、その体制は現在まで継続中と考えられる。経常収支、貿易収支共に赤字状態になり、前者が後者より赤字幅が小さいというA3状態になっている。これはすでにふれたように、アメリカ合衆国が巨大な商品吸収国になっており、その資金は一部貿易外収支の黒字によって補填されているものの、多くは主要な経常黒字国・地域からの資金流入によって賄われていることを意味している。アメリカ合衆国は商品、資源、資本、人材を吸収して技術革新の集積地となり、それが海外からの投資を引き寄せ、国際通貨としての米ドルの信用を保持し続けたといえる。しかし、この体制は国際分業の深化とともにアメリカの既存の産業の優位性を失わせ、産業構造の変化に伴う所得格差を深刻化させて、反グローバリズムの名のもと体制批判の気運を国内に盛り上げる源となった。現トランプ政権の包括的な保護主義政策（関税政策）はこのようなアメリカ合衆国の国際収支上の性質を修正し、国内の不満を

引き起こす根源を是正しようとする試みと解釈することができる。

この政策がアメリカ合衆国の赤字体質を是正させることに成功するとしたら（国際的資金移動の観点からはなほだ困難を伴うと考えられるのであるが）、国際経済にどのようなインパクトを与えるであろうか。まず何よりもアメリカ合衆国の対極にある中国に反作用をおよぼす、すなわち黒字体質の修正を迫るであろう。もしそれに抗うとすれば、中国は、アメリカ合衆国とは分断された中国を中核とする経済圏を形成し、一時的には黒字の貿易収支を実現するような経済的関係（分業体制）を構築せざるを得ないであろう。しかし、その体制が継続するためには、最終的にはその経済圏の中で中国自身が輸入を増やし資金還流の体制を実現せざるを得ない。これまで分析してきたように、中核国が長期的にA1またはB1の状態を維持するのは国際的な資金還流の観点から困難となり、維持可能となるために商品吸収国となって貿易収支が赤字となり周辺地域から商品を購入して、それらの地域への資金還流を継続せざるを得ない。体制内の資金還流を維持するには、その赤字を貿易以外（サービス、海外投資収益など）の収支の黒字によって補うか、（国際通貨としてのアメリカドルの供給のように）国際的信用供与によって埋め合わせるしかないであろう。

このような分断化の道が想定されるのであるが、これ以外に第3の道はあるのであろうか。もしアメリカ合衆国と中国のプレゼンスが頭打ちになるとすれば、両者の中間領域に自由貿易圏（経済連携複合体）を創生する可能性がでてくるであろう。それは換言すると、その経済圏のメンバー国同士が過度に二大国に貿易上依存することなく、相互に分業関係を築いて極端な貿易収支の黒字・赤字を計上しない状態を築くことである（これは安全保障上等距離の完全中立を意味するわけではない）。メンバー国の一部で経済発展上資金が必要な時には、経済圏内で資金を集積して融資する、自由貿易に即した国際金融機関ないしは国際金融市場が必要となる。これはすでに戦後の国際経済体制において設立されていたものであるが、両大国が戦

後において培われてきた自由貿易体制の破壊因子となりかねないという状況下では、改めてその機能の再構築が必要となるであろう。日本はその自由貿易圏の重要な担い手になり得る。しかし、そのためには両大国への過度の依存と構造的な赤字要因となってきた化石燃料の海外依存からの脱却を図らなければならないであろう。それは輸出と輸入先の内容を含めた分散化であり、圏内の地域・国のニーズに合った製品・サービスの提供であり、地産地消型の再生可能エネルギーへの大胆な転換による慢性的な赤字要因の削減を含蓄する。その実現には当然時間がかかる、しかし不可能ではないはずである。

参考文献

- 明石茂生 (1995a) 「国際収支と構造変化：1881-1991」『成城大学経済研究所報告』。
- 明石茂生 (1995b) 「国際収支の長期的変化：パターン分析」『成城大学経済研究』 128:57- 78.
- Crowther, G.(1957), *Balances and Imbalances of Payments*, Harvard University Press.
- 経済企画庁編 (1984) 『昭和 59 年版経済白書』大蔵省印刷局。
- Halevi, N.(1971), “Test of the ‘Balance of Payments Stages’ Hypothesis,” *Jouranal of International Economics* 1:103-17.
- Hitiris, T.(1988), “U.S. Balance-of-Payments Stages 1790-1985: A Statistical Investigation,” *International Trade Journal*, Volume 2(3):247-61.
- Kindleberger, C.(1963), *International Economics*, 3rs ed., Irwin.
- Lévy-Leboyer, M.,(1977), “Présentation: La capacité financière de la France au début du XXe siècle,” in M. Lévy-Leboyer ed., *La position internationale de la France: Aspects économiques et financiers XIX^e-XX^e siècles*. Editions de l’Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales.
- 松井透 (1991) 『世界市場の形成』岩波書店。
- 尾田温俊 (2009) 「クローザ国際収支発展段階説の検証」『福山大学経済学論集』 24(1)：63- 86.
- Ono, M.(2014) “Examining the ‘Balance of Payments Stages’ Hypothesis,” *Global Economy Journal* 14(3-4):373-97.
- 須田美矢子編 (1992) 『対外不均衡の経済学』日本経済新聞社。
- 武田英俊 (2024) 「国際収支の発展段階説に関する批判的考察」『日本大学国際関

係学部研究年報』44：1-11.

西孝（2010）「国際収支の発展段階説から見た東アジア諸国に関する覚え書き」
『杏林大学社会科学研究』26(2-3)：33-41.

Yang, H., M. Zhang, Y. Xiang, and Y. Yang(2023), “The Balance of Payments Stages Hypothesis: Improvements and New Discoveries,” *International Review of Economics and Finance* 84: 635-656. <https://doi.org/10.1016/j.iref.2022.12.004>.